

## 我が研究生活

—平安朝研究四十五年（五・完）—

山中 裕

今回は、このシリーズのまとめとして、関東学院大学を定年になる頃から、今日に至るまでの八年間の学究生活を述べることにしよう。

関東学院大学の最終年、つまり昭和六十三年には、長年執筆に携わってきた新書本『藤原道長』が完成した年である。もともと自分としては、道長については吉川弘文館より刊行されている人物叢書のシリーズ中の一冊として書きたかったのである。しかしその人物叢書には、私は既に『和泉式部』を上梓しており、一人が二冊は無理だろうとの編集部の配慮によって、『藤原道長』については、他の人が執筆することになってしたが、今に至るまでまだ刊行されていない。

ちょうどこのころ教育社より、平安時代についてのものを何か一冊と請われていたために、道長については教育社歴史新書として完成することとしたのである。そういうわけで、これは私としてはもちろん一生懸命書き上げたものではあるが、道長についてはこの新書のみではまだ飽き足らず、近い将来にまた何らかの形で書いてみたいと思っている。

なおこの年には、『御堂関白記全注釈』（長和元年）を完成している。また思文閣出版より『古記録と日記』という題で新しい仕事を依頼された。至文堂からも鈴木一雄氏との共編で、『平安時代の文学と生活』（国

文学解釈と鑑賞別冊、全三冊）も依頼された。これらはいずれも編者であったから、大勢の人々に原稿執筆を依頼し、完成までには数年を要した。詳細については刊行の年のところで述べることにする。

昭和六十四年、すなわち平成元年は、『源氏物語』の元服と結婚（水茎七号）、「源氏物語年中行事事典」（別冊国文学三六号）など、源氏物語について再び関わることになった他、山川出版社の高校教師向けの小冊子に「宮廷の年中行事（上）（下）」（歴史と地理四〇六、四〇九号）を執筆している。こうしてこの年も、やはり年中行事儀式と源氏物語とに力を注いだのである。また同じく歴史物語、即ち栄花物語を中心に、国文学解釈と鑑賞の特集「歴史物語の世界」（五四巻三号）に「歴史と文学」も書き上げている。

さて翌平成二年は、関東学院大学に異動して一〇年目の年である。非常勤講師の時代も入れれば二〇数年に及ぶ関東学院大学も本年限りで、いよいよ来年は定年で去らなければならないのである。私の定年を期して、関東学院大学ではその紀要を山中退職記念号に充てて下さることになり、また最終記念講演をも催して下さった。平成三年二月十四日、私は「平安貴族の生活と文化」の題の下にその講演をおこなった。同僚の先生方も非常にたくさん聴講においでになられ、また卒業生や学生たちとくに私のゼミの学生諸君が多く来られ、花束を贈呈されるなど、思いの多い一日となった。

さてその数年前、平成元年に、突如として昔の友人である中村美智子氏から電話があった。「増加」のことについて相談したいことがあるので、是非お会いしたいというのである。中村氏とは私が成城の小学生の

時からの友人で、彼女は成城の女学校を卒業後、さらに東京女子大を卒業し、成城大学女子短大の教授を長年つとめた人である。そしてその成城女子短大を定年で辞めた後、当時は調布学園女子短大の学長になっていた。その彼女から「増加」のことについて相談したいとの電話であったので、私は今後の新学科を作るための「増加」の話とは夢にも思わず、彼女が花が好きであったことを勝手に思い出しては、その「造花」とでであろうと早合点し、造花の歴史についての研究について少し勉強までして会いにいったのである。

さて会ってみると造花の歴史とは全く関係なく、用件は学科の増加のことであった。即ち調布女子短大に新たにもう一つ学科を新設するという話なのである。お互いにしばらくはおかしくて大笑いをしてしまった。調布女子短大はそれまで英文科のみであったのであるが、中村氏としてはこの際、日文科（国文・国史・国語の総合学科）を造りたいのである。そして私にその新設の日文科の学科長をともいわれたのである。小学校以来の友人である中村氏にそのようなことを言われると私としては引き受けざるを得ない。私は喜んでその職に就任する旨を伝えた。もう七〇歳になるので、関東学院大学を定年退職後は、どこへも行かず家にいて、研究に専念したいと考えていたのであるが、私もまだまだ元気であり、昔の東大時代に比べれば職務も軽くなっているし、もう五年、つまり七五歳まで勤めることに決心したのである。

さて調布学園女子短大に入ってみると、日文科には顔なじみの先生方も多く、また若い先生はどこかの学会などで数回お会いしている人ばかりということ、楽しい毎日が始まった。私は一週三回、四乃至は五講

座をもち、研究の時間も少なからずもつことが出来た。しかしその調布学園女子短大もいよいよ来年（平成八年）三月には定年ということになっている。感無量である。とはいえ短大は川崎市の麻生区にあったので通勤時間片道二時間、往復四時間は正直いつて疲れる日も少なからずあったのは事実である。

中村学長は私の赴任後しばらくして退職され、その次の学長は、新たに私たちと共に入った酒井憲二氏であった。酒井氏の学長就任は教授会の選挙の結果であるが、氏は学長としてこの上もなく適任であり、今までけんめいに学長としての業績を挙げられ、その学長の指名によって私は副学長に就任し、また図書館長も勤めさせていただいたのである。

ここにはこれまでまったく高校か中学の図書館程度のものしかなかったのであるが、立派な図書館が完成して、初代の図書館長に就任したのはまことに嬉しかった。蔵書も短大の図書館としてはかなり充実させることができ、多くの本にめぐまれて楽しい日々を送らせていただいた。

さてここでもう一度さかのぼって、平成三年からの自分の業績について順々に述べていきたい。平成三年というのは、先にも述べたように、三月に関東学院大学を定年で退職し、四月より調布学園女子短大に勤務することになった年である。新しい学校へ行き、教授として新しい講義をすることになった。長い間教員生活をしてきたものの、短大は初めての経験であり、最初は何かと気骨がおれる毎日であった。それでも半年くらいたって夏休みに入ると、ある程度慣れることができた。短大ではさっそくに日本文化学科の学科長に任じられた。学科のまとめ役というのがいかに大変であるかをしみじみと知るところであった。

先にも述べたように、この年、関東学院大学を去るに当たって、お別れの講座とは別に『関東学院大学紀要』の特輯号として、学内外のゆかりの先生方が十数人、論文を書いて下され、その後には私を囲んだ座談会の記事もあり、その時までの私の詳細な業績目録も載せていただいた。この目録は現在の関東学院大学助教授倉本一宏氏の献身的な努力の結果、完成になったものである。

またこの年には森田悌氏と二人の編で『論争日本古代史』（河出書房新社）を完成させた。これもいつも研究会などで親しくしていただいている人々などに執筆をお願いした。執筆の皆々は、古代史の各分野についての専門的な研究を要領よくまとめてくれた。

また親しくしている後輩たちが、私の古稀記念論文集を吉川弘文館より出版する計画を立ててくれ、私の編で『撰関時代と古記録』、『王朝歴史物語の世界』の二冊を完成させた。前者は撰関政治の本質をあらゆる見地から検討したもの、後者は源氏物語・栄花物語をはじめ、その頃の文学作品そのものの研究と、それらの作品の生まれる時代背景、即ちその当時の社会を明らかにしたものである。

また平成二年に刊行した『御堂関白記全注釈』（寛仁二年上、高科書店）に続き、この年には『御堂関白記全注釈』（寛仁二年下、高科書店）を、また『栄花物語研究』第三（高科書店）も発刊した。後者では私は「『栄花物語』と中関白家」を書いている。『栄花物語研究』第三は、一人一人の発表に研究会で討論をかわし、盛んに話合った後に各執筆者が論文にまとめたものであって、三冊目を出すことができ嬉しかった。

また木村正中氏の編による『論集日記文学』（笠間書院）があり、こ

こに私は「和泉式部と敦道親王」を執筆している。和泉式部日記に見える和泉式部と敦道親王の親しい関係の真相はどんなものであったのか、敦道親王側から歴史の文献を可能な限り蒐集し、書き上げたものである。私自信もかなり興味をもって完成させたものである。

またこの年十一月から十二月にかけて、先に述べた鈴木一雄氏との共編になる『平安時代の文学と生活』のうち、はじめの二冊が完成した。1は「平安貴族の環境」、2は「平安時代の儀礼と歳時」である。国史・国文両方面の方々が、これも力を込めて皆が執筆して下され、よい本が完成したと思う。この至文堂の企画は、池田亀鑑先生の『平安時代の生活と文化』（角川文庫）をさらに大きくひろげてゆき、文献もたくさん引用して、もっと細かな内容にするというものであった。

第三冊目は「平安時代の信仰と生活」と題して翌年二月に刊行された。「平安時代の仏教」「平安時代の神社」「御霊信仰」「陰陽道」などをそれぞれ大隅和雄・森田悌・五味文彦・村山修一氏など、歴史家の先輩・同僚・後輩らに執筆をお願いしてユニークな論文を多く書いていただいた。その他この冊には、「平安貴族の邸宅」「乗物」「調度」をはじめ、「食事・病氣と医学」「容儀・服飾」「娯楽・遊戯」など国文学会の人々に、まことに生き生きとした論を展開していただいた。

さてここで、私事にわたって恐縮であるが、我が妻のことにふれさせていただきたい。この平成三年には、妻が病に倒れ、病名は「肺がん」と診断された。そもそも健康の調子が不審であるといひだしたのは前年の秋のことである。そしてこの年一月に入院となった。即座に手術ということになったが、その結果は大変良好であって、一週間で退院となっ

た。その後、数カ月は病氣のことなど忘れたように元氣であった。しかし入院した築地の国立癌センターの先生は、結果についてはあまりよくは言われず、最初から、あと二年くらいの命であるということを明確に話されたのである。その時の私の心の苦悩は、とても言葉では表現できないものであった。しかし学校と研究とはおろそかにできないもの。苦しい中に平成三年は暮れていった。

さて平成四年、妻の病状は正月は一応無事に過ぎた。このような状況にあるためか、私の研究は遅々として進まなかった。この年、古代学研究所の企画として、角田文衛氏の編で後白河法皇についての特輯を吉川弘文館から単行本で出すことになり、関東・関西の両方面の大勢の専門家に、来春出版ということで原稿執筆が依頼された。

これに先立って前年の春から、京都の三十三間堂の近くの明法院門跡で、右掲の書の執筆予定の人々の中から十数人が依頼されて、後白河院についての連続講演会が行なわれた。毎月一人が講演し、その講演の結果を集めて、仏教文化講座たより四二、四三号が「三十三間堂御開山後白河院行真法皇八百年聖忌記念特集号」として三十三間堂より刊行され、また『後白河法皇とその時代』という単行書にもまとめられた。私は「後白河天皇時代の年中行事」と題して講演し、その内容は四三号に掲載されている。

またこの年には、石川徹先生の八〇歳の記念論集として、先生の編になる『平安時代の作家と作品』への投稿を依頼され、「清少納言論」とくに年中行事の叙述を中心として」を書き上げた。この頃入退院を繰り返していた妻は、やがて十月十八日、ついに帰らぬ人となってしまった

のである。この後しばらくは、私の苦悩は多大であり、何も手につかぬという状況が続いていた。

さて平成四年の秋はこういった事情でほんやりと毎日を送っていたのであるが、この年の十二月十日には、あらかじめ斎藤熙子氏より講演を依頼されていた。斎藤氏からは、このような時期であるから講演は中止にしようとお電話をいただいたが、私は参りますと答えて、講演を予定通り行なったのである。依頼された題は、「栄花物語と道長」であつたため、心地好く話すこともでき、これがきっかけになって苦悩からだいぶ救われたような気持ちとなった。十月より一ヶ月半ほどの間、本当に苦しんでいた私であつたが、この講演を機会にやっと立ち直つたのである。ようやく元氣になったので、妻の葬儀以来お世話になつた人々に電話をかけるなどしてお礼を述べ、その親切な御好意に心から感謝している旨を伝えた。もとの東京大学の人々、講師で長く通っている国学院大学、その他の大学院生たち、現役の調布学園女子短大の人々など、さらに研究会のグループの人々等の親切には、本当に心から感謝している。これらの人々は、この年の師走から翌平成五年の新年にかけて、入れ替り立ち替り訪ねて下され、本当に有難いこととしみじみ思つたものである。

そのうちの一人、幾永朋浩氏は、私の本当に寂しそうな様子を見て溜まりかねたのであろうか、我が家へ当分の間、泊って住みこんで下さるようになった。彼自身も勉強への情熱がこの頃より非常に強かつたため、そのような結果に至つたとも言える。幾永氏が我が家へ入って以来、私も元氣を取り戻し、彼も毎夜よく勉強をした。私もようやく依頼原稿な

どに手をつけられるようになったのであるが、それはまったく彼のお陰であるといつて過言ではない（その幾永氏は、現在結婚して、我が家の隣に住んでいる）。

こうして平成五年には、何とか元氣を取り戻し、まず一月に、数年来、皆に原稿をお願いしていた『古記録と日記』が、京都の思文閣出版より私の編で上・下二冊の単行本となって完成した。多くの方々が古記録と日記について、新しい見解を示され、よき本が完成したことは嬉しかった。続いて三月には、やはり私の編で『源氏物語を読む』（吉川弘文館）を出している。これは国史・国文の人々総動員で書いたものである。そして先に書いた通り、昨年私もメンバーの一人として京都で講演した後白河法皇関係のものをもとにして、吉川弘文館より古代学協会の編で『後白河院―動乱期の天皇』という大著にまとめられた。先の仏教文化講座をもとにしているとはいえ、それぞれかなりの手が加えられ、立派な論文集になった。どうやら研究も軌道にのりはじめ、九月には「延喜式と年中行事」（『古代世界の諸相』角田文衛先生傘寿記念会編、晃洋書房）を完成している。

平成六年には、高科書店の都合でしばらく出版が遅れていた『御堂関白記全注釈』（寛弘元年）を出すことができた。この本は、従来はすべて京都の古代学協会での夏の講読の結果をまず雑誌「古代文化」に掲載し、さらにそれに訂正や補訂を加えて本にするという方式を取ってきたが、私は、それに東京の学士会館や京都の陽明文庫での御堂関白記の研究会の成果を加えたいと思うようになっていた。学士会館でも、月一回研究者が集まって古代学協会で行なっているのと同じ形式で講読を行な

い、すでに一〇年の蓄積がある。また陽明文庫でも同じく一〇年近く、やはり月一回研究者が集まって講読・研究を行っている。こうした東京や京都での講読の成果もすばらしいものであったから、古代学協会での講読の成果の間にすこしずつ加えて全注釈の中に取り込んでいこうと志ざしたわけである。その最初の試みがこの寛弘元年分であった。これにはまず東京の講読の分が取り入れられたが、陽明文庫での講読の分も次第に取り入れていくつもりである。このように原稿はもうかなりたまっているのであるが、今、高科書店が以前のように原稿を入れて約一〇ヶ月で出版に至るというふうにはいなくなってしまったのが非常に残念である。それでも高科氏は次々に原稿を入れるようにと言われているので、そのように懸命に努力しているところである。

さていよいよ平成七年に入ろう。本年は、昨年から懸命に執筆にかかっていた、「摂関政治史―藤原道長を中心として」を勤務先の紀要である「調布日本文化」に書き上げた。藤原道長を中心として、摂関政治とはいかなるものであったか、あるいは内覧と摂政と関白の違いなどを、文献史料を豊富に利用して、とくに御堂関白記と小右記を中心にしながら、今までの説を詳細に検討しつつまとめあげたものである。これは自分分としても、最近の摂関政治の研究の何か一つのともしびともなれば幸福であると思っている。

つづいて小松茂美氏の依頼によって雑誌「水荳」に「御堂関白道長と年中行事」を書いている。道長が国家的な行事、あるいは私的に道長邸で行なっている行事などについて、九条家流の儀式作法をどのように行なっているかを明らかにした。道長邸の行事では、そこに美しいみやび

な気分をもち儀式作法は十分に守りつつも、道長独特な気分で、その行事に新しい美的色彩を与えている。それが無意識に自分の日記にそのまま描かれているところは、まことに道長ならではの儀式にのぞむとこであつたろう。

さてさらに本年には小学館の日本古典文学全集中の『栄花物語』1を完成させている。『栄花物語』は、昭和三十九―四十年に、大先輩である故松村博司氏と共に岩波書店の日本古典文学大系に上・下二冊として仕上げたところである。この時は私もまだ若く、無我夢中で松村博司氏の指導を受けつつ完成したことを覚えていたが、今回は、やや落ち着きながら楽しんで仕事を進めることが出来たことは本当に嬉しかった。これは私と秋山虔・池田尚隆・福長進各氏との四人の共著であつて、その三人が懸命にやって下さればこそ本書は完成したのである。私も三人から多くの助言を受けつつ解題を書き、全体を仕上げていった。私に二五年前の松村氏の下での作業の大変さが強く印象に残っているように、今回の池田・福長両氏もまことに大変であつたと思う。とくに福長氏は、完成後病気になる、数日入院しなければならぬという結果になり、すまなく思っている。そこまでしなくても、私がつと力を出してさしあげればよかったと本当に申し訳ない気分である。『栄花物語』はご承知のように全四〇巻、日本古典文学全集本の第一分冊は巻十までである。あと二冊出さなければならず、頑張らなければいけない。しかしそれにしても、岩波本から二五年後にまた新しく『栄花物語』の注釈を担当できたことは本当に嬉しく、しかもそれを気の合ったスタッフと一緒にやれるということ、この上もない喜びである。今回の完成の結果を見てみ

ると、分り易く、しかも明確に書き上げられており、この上もなくよいものが出来たと自分ながら喜んでいる。しかし私にとっては、前に苦勞して岩波本を仕上げたからこそ、今回これだけのものが出来、それは私以外の三人の偉大なる力によるものであるが、本書および岩波本ともに特徴があり、栄花物語を研究する方々には、是非両書を拝読していただければ幸甚であると思う。

さて今後は、『栄花物語』をはじめとして、まだやらねばならぬことは多い。なかなか大変であるが、妻を失った私としてはこのように多忙な毎日が続いているということはかえって幸せであると思っている。現在、このように元気で生きていられるのも多くの人々に助けられているおかげである。

現在の調布学園女子短大での勤務も、いよいよ今年限りで定年である。その後は、まだまとめたいと思いつつも仕上げていないものの完成に努力しようと考えている。

考えれば、東大史料編纂所以以降、私の研究生活は四五年になる。大勢の方々に助けられて、どうにかそれなりにここまでやってこれたと感慨無量である。しかし私の研究は、やはり平安朝ということで一貫してきている。道長、御堂関白記、小右記、栄花物語、大鏡、紫式部、紫式部日記等々、国史・国文の両面について研究を進めてきたのである。そして史料編纂所以来、文献は非常にたくさんものを見てきたと思う。その中で私はやはり古記録・日記が非常に好きであつた。しかし古記録は本当に難しい。古文書も難しいが、古文書以上に古記録は難しい。古記録の中でも小右記・御堂関白記は特に難しい。歴史の研究はこれら古文

書・古記録の精読にある。したがって古記録を読むにはただ一人でこつこつと読んで、一応満足していたのでは物足りない。多くの優秀な衆知の人々に集まってもらって、大勢の意見を聞きつつ読んでいくことが大事である。そして今、私は多くの後輩の、古記録に興味をもつ人々とともに、多くの意見を尊重しながら古記録を読む会を作って読んでいる。

これら古記録の主眼点は、やはり儀式の書きようが大きな重点となろう。しかし古記録の記述は、それによって儀式を明確にするばかりではない。政治上の事件、文化に関するもの、文学の和歌そのものなど、内容は豊富である。それらの内容の史実を、記述者はどのように理解してこの日記を書いているのか、この日記に何を書こうとしたのか、それを我々読者が十分に見極めることが大事である。今後私はこれら古記録類を、仮名ものの歴史物語などと比較しつつ、じっくりと読んでいきたい。女流日記の日記とは何であるか。この問題を少しずつ解明しつつ、いわゆる日記と儀式との近い関係も明らかにしていきたい。例えば西宮記と御堂関白記とは、同じ種類の儀式については記述に類似点が多い。そのあたりを明らかにしつつ、今後さらに今までの研究をまとめていきたいと思う。

それにしても私の研究は、大勢の人々にお世話になりつつ、過去もこれから将来も進んで来、進んでいくのである。国史学・国文学関係の大勢の方々に感謝しつつ、今後さらに研究を進めていきたいと思っている。四五五年で（もっとも連載が永く続いたため、今や五〇年の回顧となっているが）研究は決して終ったわけではない。最後まで研究は奥深いのである。